41. 閉塞性黄疸をきたした十二指腸癌の1例

奈良橋俊子，久保聡志，有本　央
福澤　健，五月女直樹（国立横浜東）

症例は49才女性で眼球黄染，肝機能異常指摘され入院。腹部US，腹部CT，PTCD上，総胆管拡張を認めるも腫瘍像はなく，GFにて十二指腸乳頭部やや口側に隆起性病変認め，生検にてadeno caであった。十二指腸低緊張造影にても同部位に病変を認め，十二指腸癌胆管浸潤疑いPpPD施行。病理組織像にて十二指腸壁より連続性に胆管に浸潤する硬化像を認めた。閉塞性黄疸の原疾患として，原発性十二指腸癌は比較的稀なものである。

42. 最近の当院におけるHelicobacter pylori（以下Hp）感染症の現状

山口和也，木村雅樹，栗田純夫
（軽井沢病院）
登内昭彦，宮尾陽一，横山　宏
（同・外科）

98年1月より99年12月までの，初発および再発を繰り返す潰瘍患者を主な対象に，121例の生検組織を用い，Hpの存在診断を行った。潰瘍例でのHpの陽性率は胃十二指腸潰瘍＞十二指腸潰瘍＞胃潰瘍であった。潰瘍例での除菌成功率は胃潰瘍＞十二指腸潰瘍＞胃十二指腸潰瘍であった。三剤一週間投与で81.1％の症例で，除菌に成功した。前回報告の二週間法と比較し，除菌率の低下を認めたが，除菌効果の統計学的有意差は認めなかった。

43. 君津中央病院におけるH. Pylori除菌療法の経験－除菌のファーストラインを模索して

桜井　渉　（君津中央）
斎藤博文，駒　嘉宏，早坂　章
鈴木紀彰，森　博道，福山悦男
（同・内科）
柚木宏和　（泉台クリニック）
平野達也　（千大）

13C-UBTを除菌判定に用いて，H. Pyloriに対して新三剤療法；LAC，LMC，LAM（L：LPZ；A：AMPC；C：CAM；M：MNZ）で除菌を試みた。それぞれの除菌率は82.2％，85.7％，93.0％であった。各群間に有意差はなかったが，LAMが最も除菌率が良かった。副作用も少なく，安価でもあり，LAMは除菌のファーストラインと考えて良い治療法と思われた。

44. 上部消化管出血に対する内視鏡治療の検討（食道・胃静脈瘤，EMR・ポリペクトミー後を除く）

植田吉彦，小山秀彦，巌　俊
瀬田敏勝，長門義宣，安原一彰
仲野敏彦，伊藤文憲，久満董樹
（船橋中央）
笠貫順二
（同・健康管理センター）

当科の平成7年から11年までの5年間における静脈瘤，内視鏡的手術後の出血を除く上部消化管出血に対し，内視鏡的止血術を50症例に施行した。平均年令60.5才，中高年の男性，出血部位は胃角より上部，後壁に多かった。出血性胃潰瘍が29例（58％）を占め，デュラフォイ潰瘍が10例（20％）と多く，クリップ止血法が有効であった。止血率は出血状況に影響されず，完全止血をしえた症例は全症例の48例（96％）であった。

45. 内視鏡治療におけるアルゴンプラズマ凝固法の応用

鵜飼伸一，鵜梶　実，星野和彦
高橋裕之，一原　亮
（小田原市立）

アルゴンプラズマ凝固法（APC）は，主に外科手術での止血に用いられてきたが，近年アプリケータの開発により内視鏡治療への応用が可能となった。APCの原理は，高周波電流をアルゴンプラズマで誘導し，熱により組織を乾燥，失活，凝固，収縮させる。今回我々は止血以外に早期食道癌，食道静脈瘤，食道ステント内肉芽狭窄，早期胃癌，ATPの治療にAPCを応用し，有用かつ安全な方法であると考えられたので報告する。

46. 下血を契機に発見された転移性小腸腫瘍の1例

今村隆明，中田　恒，成田佳苗
三橋　修，渡邊純一郎，久保貴史
近藤春樹　（清水厚生）
中島光一，清水英一郎，伊藤　靖
谷口徹志，原　壮（同・外科）

下血を契機に発見された転移性小腸腫瘍を経験した。症例は53歳男性，主訴は下血。上部，下部消化管内視鏡にて出血源なく小腸造影にて空腸に腫瘍を認めた。また超音波，CT，レントゲンにて副腎，膵，肺に腫瘤を認めた。貧血の進行あり空腸切除施行，術後病理にて肺大細胞癌の小腸転移と判明した。肺癌の小腸転移にて臨床症状を来した結果手術を行なった例は希とされており今回報告した。